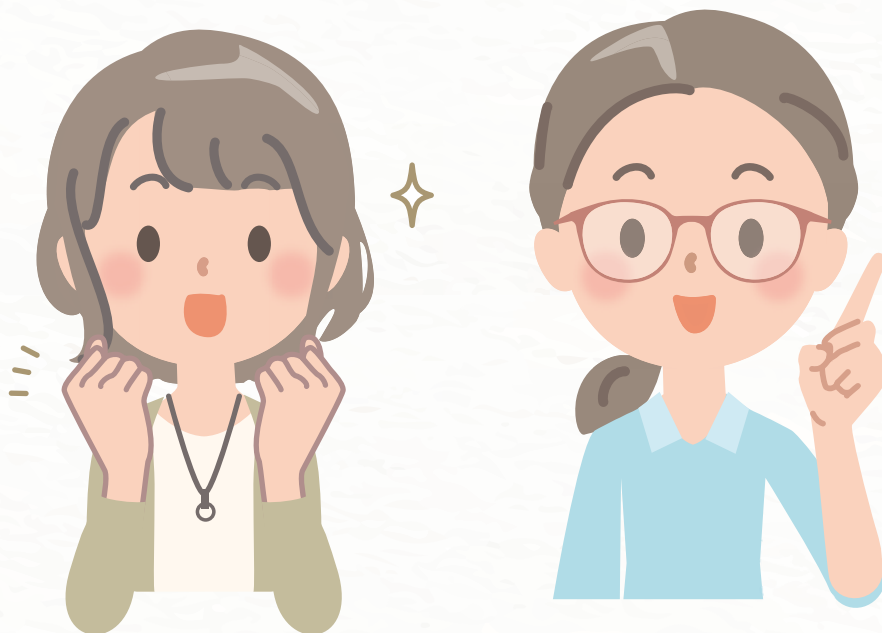


コロナ禍での地域福祉活動を
みんなで振り返る

「たちどまりの本」



もくじ

はじめに	1
第1章 コロナ禍が地域にもたらしたもの	2
第2章 私たちはこのように見えました	4
さあ、少し立ち止まって振り返ってみよう！	5
地域で奮闘したみんなの動き	6
みんなの知恵がたくさん集まった！	7
「何もできていない」って、本当ですか？	10
三密にはもう一つの意味がありました	12
生活支援コーディネーターをみつめて	13
第3章 みんなで一緒に振り返ってみましょう	14
ワーク1 この2年間の年表を書いてみましょう！	15
ワーク2 あなたが元気になれるようなことは？	16
ワーク3 「気になること」への方策を考えよう	18
おわりに	20

はじめに

令和2年から猛威を振り始めた新型コロナウイルス感染症は、私たちの生活に大きな影響を及ぼしました。緊急事態宣言の発令が繰り返される中で、ワクチンの接種は広がり、“新しい生活様式”も徐々に定着してきましたが、今なお相次ぐ変異種の発生により、フレイルや社会的孤立などの脅威は過ぎ去ってはいません。

感染拡大の当初は、地域の集い場や助け合い活動が全面的な停止を余儀なくされましたが、そのような中でも「つながりを切りたくない」「みんなと集まりたい」という住民の皆さんの声をもとに、生活支援コーディネーターなどの専門職、社会福祉協議会などの関係機関においては、地域福祉活動の再開・継続に向けた支援が手探りながらも懸命に続けられました。

この間、本会では、ニュースレター「兵庫えんだより」や機関紙「ひょうごの福祉」を通じて、生活支援コーディネーターや地域住民の皆さんの創意工夫による生活支援活動の情報を発信してきました。また、オンラインを活用しての情報交換会「えんがわナビ」では、生活支援コーディネーターの皆さんが抱える苦悩や新たな試みが共有されました。

この冊子は、このようなコロナ禍における活動のありようを一旦“立ち止まって”振り返り、つながりのある地域づくりに向けて新たな歩みを踏み出すきっかけにさせていただくことを目的に作成しました。

この間、電話・訪問等により取材をさせていただいた皆さんには改めて感謝を申し上げます。この冊子が、“ピンチ”を“チャンス”に変えていくためのささやかな一助となれば幸いです。

令和4年3月

社会福祉法人 兵庫県社会福祉協議会

第1章

コロナ禍が地域にもたらしたもの

これまで住民同士の地域での見守りや助け合いは、まずは顔を合わせ、知り合っつながることを大切にしてきました。しかし、新型コロナウイルスが猛威を振るう中で、感染拡大防止の観点から従来の活動は制限され、住民は社会的孤立などの危機にさらされることとなりました。

はじめに、コロナ禍における緊急事態宣言の発出や「新しい生活様式」の提案といった動きが地域にもたらした影響をまとめてみました。

コロナ禍で停滞した地域福祉活動

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、令和2年4月7日に緊急事態宣言が発出されました。全国のさまざまな活動が停止する事態となり、影響は地域福祉活動にも例外なく及びました。ふれあいサロンなどの「通いの場」や地域の見守り・支え合いは中止になり、高齢者を中心に、家に留まることで心身ともに虚弱となる「フレイル」や社会的孤立に陥ることが懸念されました。

さらに、自治会、地区社協、ボランティアグループなどは、予定されていた話し合いを延期・中止せざるを得ず、地域福祉活動は軒並み停滞することとなりました。

新型コロナウイルス関連の主な出来事

2020/1/6	中国武漢で原因不明の肺炎が発生、厚労省が注意喚起
2/28	全国の小中高へ臨時休校要請(3/2より実施)
4/7~5/21	緊急事態宣言発出(1回目)
4/15	県が遊興施設、運動施設等に休業要請
5/4	政府が「新しい生活様式」を発表
5/22	県が「通いの場」再開時の留意点を通知
2021/1/13~2/28	緊急事態宣言発出(2回目)
4/25~6/20	緊急事態宣言発出(3回目)
8/20~9/30	緊急事態宣言発出(4回目)

その後、一旦は感染症対策を講じて活動を再開する地域も広がりましたが、緊急事態宣言の発出が繰り返された結果、人が一堂に会する機会の多くが今なお縮小を余儀なくされています。

活動再開・継続に向けた動き

一方で、県内の市町社協などには、「つながりを切りたくない」「みんなと集まりたい」という住民の声が寄せられました。県内に配置された生活支援コーディネーター※は、3密(密集、密接、密閉)の回避や「新しい生活様式」を念頭に置きながら、創意工夫を凝らした活動の新しいスタイルを活動者と共に模索してきました。

さまざまな活動が制限される中でも、つながりを途切れさせないようにと、“今できること”に取り組む地域住民の皆さんの奮闘が各地で展開されました。

※「生活支援コーディネーター」は、介護保険制度により県内各市町に配置が行われている専門職です。地域の中での協議の場や集いの場への支援を通して、住民による支え合いを推進しています。

兵庫県社協の取り組み

兵庫県社協では、県内の生活支援コーディネーターや住民の皆さんが、コロナ禍でも創意工夫をして取り組む生活支援・地域活動を広く共有するため、感染拡大の当初より、ニュースレター「兵庫えんだより」を発行してきました。

また、人が集まること自体が難しい状況の中で、支援のあり方に悩む生活支援コーディネーターなどの声に寄り添い、情報を幅広く共有するため、オンラインのビデオ通話ツールである Zoom を通しての情報交換会「えんがわナビ」の開催を呼びかけました。



コロナ禍での地域活動を発信している
ニュースレター「兵庫えんだより」

コロナ禍における活動のロードマップ

混乱期（発生直後）

- ・感染予防のための自粛生活
- ・ニーズ把握（調査・聞き取り）等

移行期（自粛解除後）

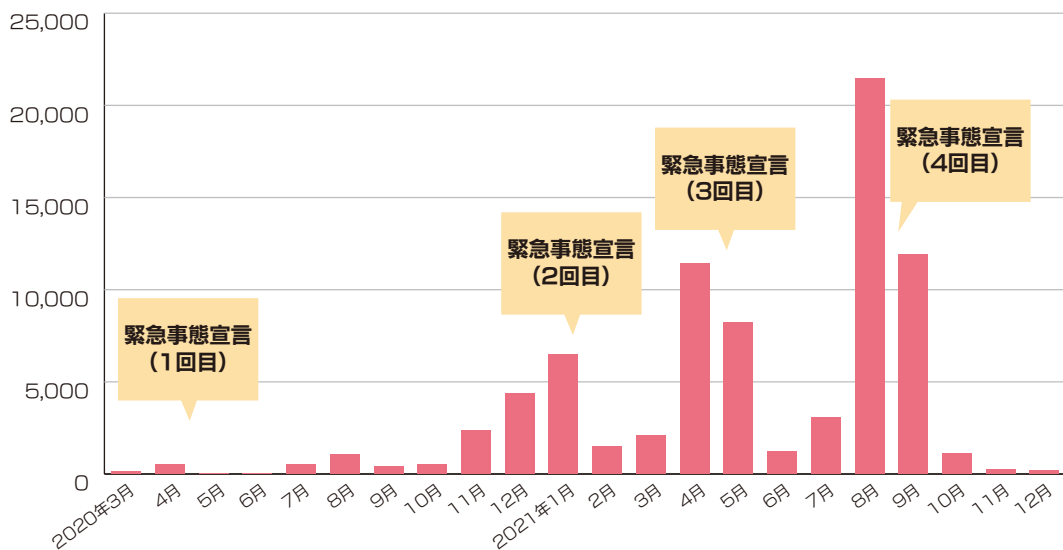
- ・混乱期の整理
- ・知恵寄せ会議等
- ・地域活動再開の検討

長期展望期 （新たな地域生活）

- ・新たな地域活動のあり方を検討
- ・生活、地域、精神、身体
の4側面から再確認
- ・移行期の情報を元に協
力体制を再構築

※「兵庫えんだより」第5号（R2.6.12）の図を加工

新型コロナウイルス 県内の感染者数の推移



第2章

私たちはこのように見てきました

こんにちは。兵庫県社協の花子とハナです。
ふたりでこの2年間を紹介します。



花子



ハナ

兵庫県社協の花子とハナは、新型コロナウイルスの感染が拡大した2年前から、生活支援コーディネーターの皆さんの活動を支援する担当になりました。しかし、緊急事態宣言等で市町に訪問に行くこともままならず、電話やオンライン等で、少しずつ生活支援コーディネーターや地域住民の皆さんの活動を聞き取っていきました。

今回は、このふたりが見つめてきた、県内市町の生活支援コーディネーターや住民の皆さんの苦悩、工夫、笑顔をお伝えしたいと思います。

今までに発行した「兵庫えんだより」や「ひょうごの福祉」なども振り返りながら、繰り返す感染拡大で不安な日々を送っておられる皆さんと、ちょっと立ち止まり、振り返ることができればと思います。

《ここからの進め方》

この本は、まずは生活支援コーディネーターや専門職で、そして、次は住民の皆さんと一緒に、この2年間を振り返る機会になるように問いかけています。ふたりの会話を聞きながら、巻末のワーク等を利用して、自分たちの地域を振り返ってみてください。

さあ、少し立ち止まって振り返ってみよう！ 2年前はこんなことがあったよね。



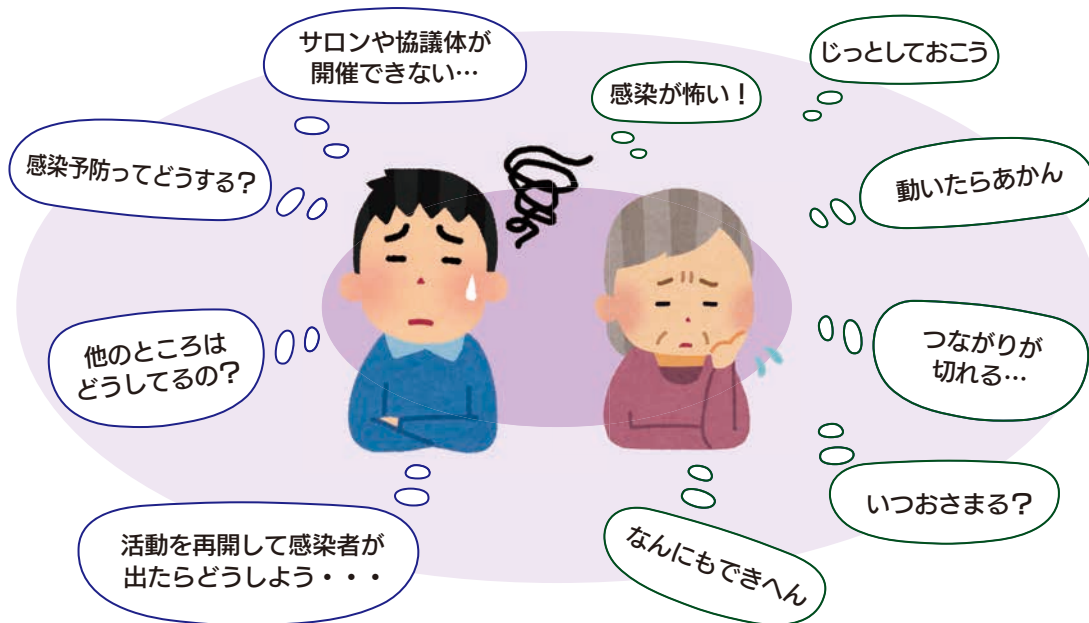
2年前、新型コロナウイルスが出てきて、「人が簡単に亡くなる病気だ！」って、大パニックになったよね。



そう、そして、私たちは、市町の生活支援コーディネーターに聞き取りを始めたの。

【生活支援コーディネーターの声】

【地域住民の声】



聴き取った声はみんな
深刻なことばかり。

そして「兵庫えんだより」
が生まれました。

これを情報として
発信しようとしたんだよね。



「兵庫えんだより」の「えん」は、「つながりをまるい円のようにつなぐ支援ができますように」と願いを込めました。

地域で奮闘したみんなの動き



ヒアリングを通じて、地域で奮闘している生活支援コーディネーターと住民の皆さんの姿が見えてきたよね。



そうそう、みんな、
必死に頑張ってた!

生活支援コーディネーターの動きは
こんな感じでした。

会えないなら、
とにかく
電話しよう

民生委員や
ボランティア
リーダーと
一緒に悩んだ

ほっとする
エピソードを
募集した

他の市町は
何をしているのか
調べた

感染予防の
チラシを作った

アンケートを
取ってみた

一方、住民の皆さんの動きは
こんな感じでした。

マスクを作って
配った

集まらないなら
公園でラジオ
体操をしよう

小学生が
高齢者にお手紙を
送った

交流の拠点の窓に
メッセージを
貼った

お花見サロン、
お散歩サロンを
始めた

電話で
安否確認をした



沢山の知恵が集まったね。
最初の2カ月は「えんだより」
も毎週発行してたよ。



最初の緊急事態宣言が出
たころでも、みんなのパワー
はすごかったね。

皆さんの地域ではどうでしたか？ 振り返って書きこんでみましょう！



みんなの知恵がたくさん集まった！

～「兵庫えんだより」「ひょうごの福祉」で振り返る～



サロン開催をみんなで考える (三木市)

※「兵庫えんだより」第1号 (R2.5.8) より

三木市社協の坂本さんに聞きました。

「3月からサロンは中止になり、楽しみにしていた花見は距離をとって桜を見ながら会場まで歩いてお弁当は持って帰る「花見散歩」にしました。ある日、サロンリーダーから連絡があり「最高齢のサロン利用者から「コロナで死んでもいいからサロンをやってほしい」と言われたことから、電話で参加者に確認すると休止前より希望者が増え、ならば「散歩にしよう！」と手作りマスクを渡しながら間隔をあけて歩きました。

生活支援コーディネーターとしては、やるなら支援を行う。迷っているなら話し合う。集まるだけでなく、みんなで考えることが、先を見越すと住民自身の育ちにつながる。住民が考えてできないところを一緒に考え支援する。これらの活動は災害時の対応につながる。と思っています。」

地域を超えて知恵を出し合う (南あわじ市)

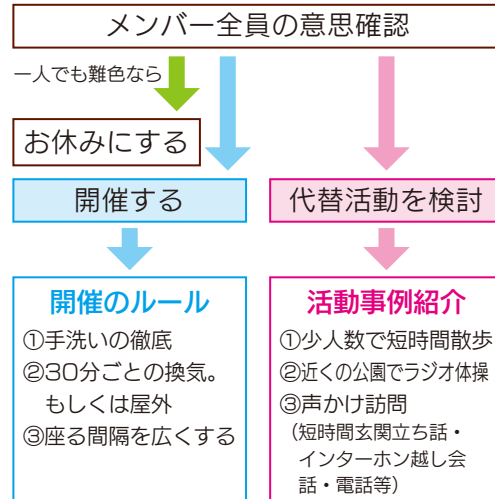
※「兵庫えんだより」第2号 (R2.5.15) より

南あわじ市社協では、マスクがないなら作ろうと、縫うのが得意な方を「あつまれ！縫野得枝 (ぬうのとくえ) さん」と題して広報誌で募集すると、神戸新聞に取り上げられ、大反響がありました。159人の縫野得枝さん



コロナ感染の不安の中でもたくましく人が動きだしたと感じた話だったわ。みんなで考えることで新たな力になってきたんだね。

自粛解除後のサロン開催の判断



動き出した住民もすごいけど、支えた生活支援コーディネーターにも驚いたわ。



開催の判断材料が先を見通すきっかけになったのね。

が2,324枚のマスクを作って、マスクのない人に渡します。このマスクづくりはほかの市内にも広がり、公民館で型紙を配りできあがったマスクを隣保内で融通しています。



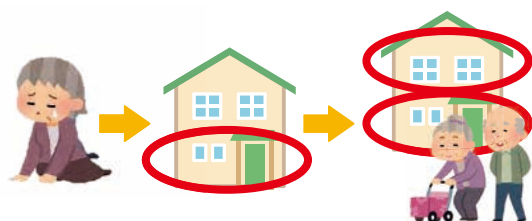
淡路市の「声 樹雄 (こえ かりお) さんもいたね。親戚だなんて、暗い話題の中で楽しい気持ちになったよ。役割を作り孤立させない優しい取り組みだったわ。



住民発！待ちに待ったサロン再開（たつの市）

※「兵庫えんだより」第6号（R2.6.26）より

サロン世話人さんたちは、5月末、周囲から不安な訴えを聞き、「サロンを開けよう」と決めましたが、狭い公民館は三密になることから、総会等に利用する2階も借りられないか自治会長に頼みに行きました。生活支援コーディネーターの後押しもあり2階の開放を承諾されると、世話人さんたちは、手書きのチラシに「今回はマスクをしてください」とさりげなく感染予防を呼びかけました。サロンの時間は決めずにいつ来てもOK。1階2階の行き来もOKと自分たちでルールを決めて、6月1日にスピード再開しました。当日は、近隣から野菜や苗の差し入れもありで大盛況でした。



再開したサロンの様子



住民の声が工夫につながって、優しさに変わったね。



これまで積み上げてきた住民の皆さんの力だよ。

集わずともつながり続けるために（淡路市）

※「ひょうごの福祉」令和2年12月号より

淡路市社協では、“再び笑って集まれる日のために”集まらない新しいつながり方として、家の玄関や庭先で野菜を育てながら、ご近所同士での見守りと交流を続ける「プランターファーム見守りプロジェクト」に取り組んでいます。

外出自粛が続き、地域内の集まりが中止となる中、住民間のつながりが途切れかねない状況に危機感を抱いた市社協が「誰でも参加できる活動はないか」と、住民の日常生活にヒントを得て企画しました。

社協の広報誌「コロナ特別号」で告知されると、参加の希望が多く寄せられ、約800戸にプランターが届けられる大きな活動になりました。「近所の方が庭先に寄ってくれて嬉しい」「野菜を育てることが生きがい」などの声が寄せられており、参加する誰もが元気を取り戻しています。

毎日の水やりを通じて自然と声かけをし合う姿も見られ、「コロナ禍以前よりつながりも深まった」と住民も笑顔で話します。



プランターファームでつながる



このプランターファームの取り組みは、他の市町にも広がったんだよね。

わがまち流のガイドライン (宝塚市)

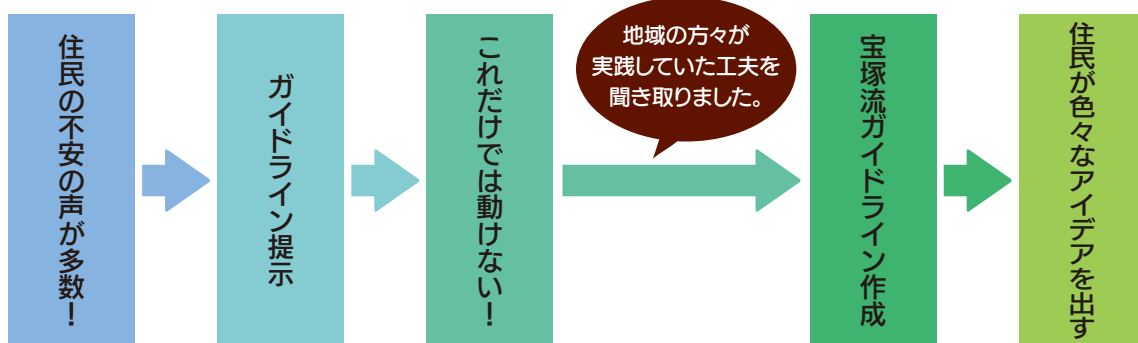

※「ひょうごの福祉」令和2年12月号より

緊急事態宣言の解除後の5月、県から「通いの場」再開に向けたガイドラインが示されました。しかし、サロン再開までの流れや感染予防グッズの作成などの具体的な手法までは明記されておらず、市社協にはサロン運営者などから不安の声が寄せられました。


そこで住民の不安に寄り添いながら活動の再開を後押しする「宝塚流ガイドライン」の作成に取りかかりました。作成に当たっては、地域活動者のニーズを基に、行政の保健師と社協が知恵を出し合い、再開への準備や代替活動の提案、マスク・フェイスシールドの作り方など、コロナ禍での活動に不可欠な情報を掲載。市社協では完成したガイドラインを全自治会とサロンに配付して、各地での活動再開をサポートすることができました。



<p>工夫① 団体用と個人用を準備</p>	<p>工夫② 屋外活動等の事例を紹介</p>	<p>工夫③ サロン開催までの手順紹介</p>
----------------------------------	-----------------------------------	------------------------------------





生活支援コーディネーターもじっとしていなかったよね。既定のガイドラインだけでは住民が動けないことをキャッチしたんだね。



いままで前例がない状況だったから、きっと手探りだったんだろうね。「できない」ピンチを「できること」を考えるチャンスに変えていったのね。

皆さんの地域ではどうでしたか？ 振り返って書きこんでみましょう！



「何もできていない」って、本当ですか？



生活支援コーディネーターも住民も「何もできなかった」って言うけれど本当？

私たちは、見てきたよね。

感染拡大を繰り返しても、ワクチン接種で大騒ぎになっても、工夫し続けてたわ。

聴き取った中には、えんだよりに載せていないけれど沢山の支え合いがあったね。



こんな声をたくさん聴きました！（ハナの手帳から）



- | | |
|------|---|
| R2.4 | 会食ができないので、まちの旅館やスーパーと協働してお弁当を作り、ボランティアさんが配食。まちがひとつになりました。 |
| | オープンが延びた地域交流拠点の窓にメッセージを貼り、集まらなくても思いを伝えました。 |
| | サロンボランティアが全員の寄せ書きを持って各戸を訪問。妻を亡くした男性からお礼としてサロンボランティア全員にメロンが届きました。メロンには「ありがとうございます。元気もろた、うれしかった。安倍さんが10万円あげるって言うたから受け取って」と手紙が添えられていました。 |
| R2.5 | 民生委員等がお手紙にマスク、アメ、家でできる体操のメモを添えてポストに投函すると、その夜に「ありがとう」の電話が。反対に元気づけられました。 |
| | 居場所のカフェに高齢者を「お誘い隊」が誘っていたのが、来られなくなり、笑顔とコーヒーの「お届け隊」を実施。障害のあるAさんの笑顔が感動的でした。 |
| | 引きこもりの方、就労支援事業所に通っている方、学童の子どもたちが花壇づくりでお互いに教え合い、すてきなふれあいが始まりました。 |
| R2.6 | 自粛中の給食サービスで市内の飲食店が調理を担ってくださり、手の不自由な配食利用者から「ありがとう」の絵手紙が届きました。 |
| | 住民から他の地域のことを知りたいという声を聴き、情報誌「ねっとわ〜く」を復活。「そうか、どこも同じだな」と安心してサロン開催準備を進めています。 |
| R2.7 | 住民から「コロナ負けま川柳」を募集。一人でもできてみんなで笑えます。 |
| | 生活支援コーディネーターが学生寮に行ってみると学生が生活に困り、誰にも相談できない状況を発見。学生と企業と地域での活動につながりました。 |

R2.8～ ふれあいサロンでコロナ禍での防災を考えようと「お連れ避難」を実施しています。

自粛で花火大会が中止になったことから、住民が各戸に線香花火を配り、当日の20時に一斉に家の前で線香花火を行いました。

R3.7～ ワクチンの予約ができないことを見越して、常設の居場所でオンラインの予約を代行しました。

車が動いていないことに気が付いたお隣が電話をかけると「濃厚接触者で動けない」とのこと。お買い物を手伝い、窓からメッセージを送りました。

耳が遠く、ワクチンの予約ができない人を自宅に呼んで、5人がかりで一斉に予約の電話をしました。一番早くかかった人が5人分の予約をとったそう。

R4.4～ 体操は人数制限があるため、電話で毎日「生きてる？」と短い交流することになりました。

サロンが出来なかったため、公園でラジオ体操を始めたら、登下校の子どもの交流が始まりました。

宇宙飛行士向井さんが宇宙に連れて行ったメダカの子孫を飼おうと水槽を集めたり、餌やりボードを作ったり、紙芝居、歌をつくろうと、地域は「宇宙メダカプロジェクト」で盛り上がっています。

男性が囲碁グループをいつの間にか立ち上げておられました。

コロナ禍の生活を知った、段ボール製造の企業が就労支援の場を、中華飲食店が子ども食堂に唐揚げ弁当を延べ2～3千個提供していただきました。

「ZOOM講座」を開催すると、「孫に会いたい」「オンライン結婚式に参加したい」という高齢者や、子連れで集えない若いお母さん等に大盛況でした。

施設慰問ができないので、「オンライン」で人形劇等を見せることにすると、10カ所も希望がありました。

高校生の「スマホカフェ」に高齢者がいっぱい！ なんでも優しく教えてくれると大盛況です。

長年サロンを主催されている方がフードドライブのために「LINE」のつながりを作られました。



まだまだ、ここに書ききれないけれど、地域をよく知っている住民や生活支援コーディネーターだからこそ、地域の変化を敏感にとらえていたよね。

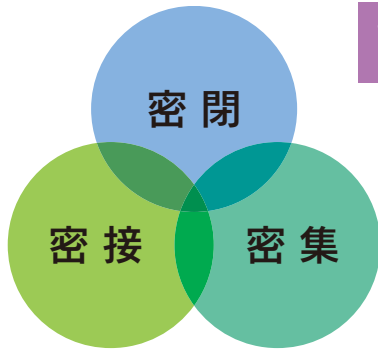


今までにつながりのなかった地域の資源ともつながっていたよ。

三密にはもう一つの意味がありました

～距離の三密を避け、三つの取り組みを進めてみませんか？～

感染予防のために避ける三密



その結果
こんなことも…。

筋力低下

足腰弱ってきた…

だれとも話してない…

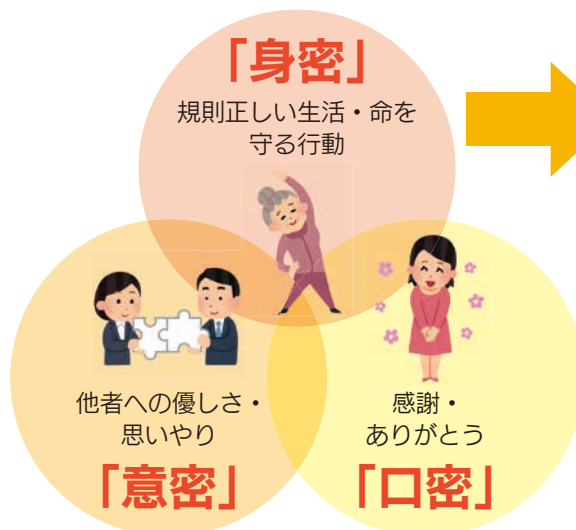
腹立つ！

孤立

イライラ

このように考え
てみませんか？

進めよう、三つの取り組み



例えば、こんなことがありました

身密

- 集落でラジオ体操を始めた。
- ケーブルTV等でなじみの体操を流している。
- 災害等に備えて、地域で避難のことを考えている。

口密

- サロン対象者等に寄せ書きを持って訪問すると、「ありがとう」とメロンが届いた。
- 手作りマスクを届けると、想像以上の喜びにこっちが元気になった。
- 人の意見と違って、いったんは受け入れる。

意密

- 気になる人に電話・訪問をしている。
- 週一回の配食の調理ができなくなり、地域の民宿等が調理を担い、まちの活性化と生活支援を兼ねることができた。

「身密（身体の働き）」「口密（言葉の働き）」「意密（心の働き）」はもともと、仏教のとても大切な教えだそうです。「身密」は規則正しい生活をする、「口密」は優しい言葉「ありがとう」をいっぱい言う、「意密」は優しい気持ち、他者への思いやりを持つことで早くに悟りを開くことができるというものです。

こんな時だからこそ、本来の三密を生活や活動の中に生かしてみませんか。距離の三密も工夫して、本来の三密を目指すために何をすればよいか、みんなで考えてみましょう。

生活支援コーディネーターをみつめて



この2年間、混乱の中でも生活支援コーディネーターが大切にしていたものが見えてきたわ。



それは、何かしら？

住民に対して

何度も感染が広がっても、何が起きてても、常に住民の声を聴こうとする姿勢。

何をめざして動いたか

再び笑って集まれる日のために“つながりの灯を消さない”こと。

集まれないけれど

集まなくても、電話だってできる。訪問してお手紙だって入れられる。距離をとれば話し合いだってできる。声を出さずに意見を書いて張り出しながら話し合ったこともあった。—とにかく、思いを聞くこと。

コロナ禍の取り組みを 今後に生かす視点は

コロナ感染拡大によって、いままでのつながりの大切さを痛感したし、違うつながり方も見つけた。そして、オンラインツールやスマホの活用など、今まで考えられなかった方法も考えることができた。

だれも置いてきぼりにしないために

活動者のリーダーは、特に重圧を感じてきた。だからこそ、話を聴くことが大事だった。そして、SOSが出せない人がいることも忘れないこと。



これは、新たな地域生活を模索していく姿勢だよ。



まだまだ、ありそう。これからも探していこうね。

あなたは、生活支援コーディネーターとして、何を大切にしていますか？



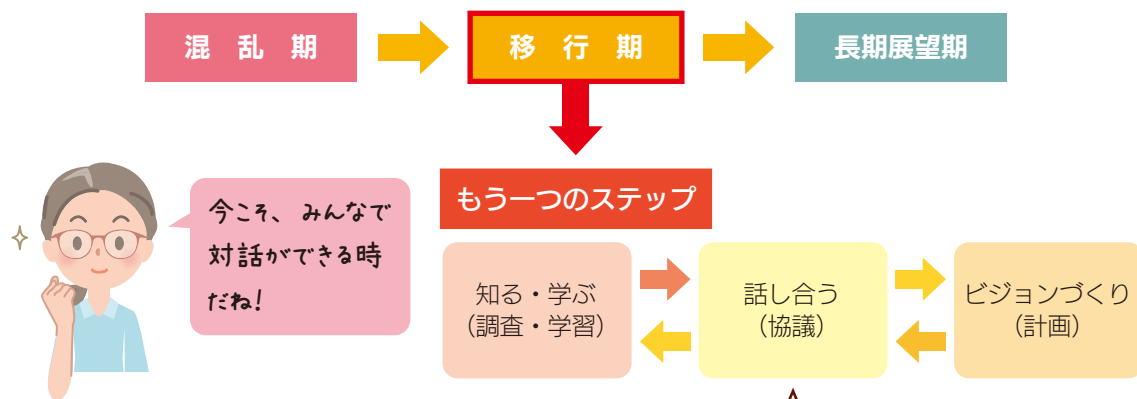
第3章

みんなで一緒に振り返ってみましょう

この状況は、だれも経験していないこと

コロナ禍は、だれもが経験したことがないことです。個人の背景、地域の事情、それぞれが違って当たり前。地域の変化と多様性を理解するために、話し合いを通じてお互いの理解を深め、ともに活動することを繰り返しながら、未曾有のこの時を乗り越えていきましょう。

そのために、生活支援コーディネーターや専門職だけでなく、住民の皆さんも一緒に、気軽なワークを行ってみましょう。



《この本のワークのすすめかた》

「こんなことがあったな」 → 「年表」を作ってみよう

元気になれそうなことは? → 「元気のもと」を出し合おう

「あのことが気になるな…」 → 「ロジックツリー」で考えよう

振り返って、
次につなげよう!

気軽に話せるきっかけとして、「ワールドカフェ」という方法もあります

- ①話し合うテーマを2～4つ決めてテーブルごとに置く。
- ②各テーブル4～5人に分かれ、そのテーマについて自分の思ったことを話す。できれば模造紙に簡単に書いておく。
- ③一人の宿主を残して、他の人は別のテーブルに移る。
- ④宿主は新しい人に出された意見を簡単に伝える。
- ⑤再び各テーブルでテーマについて話し合う。
- ⑥①から⑤を2～3回繰り返して自分の席に戻り、宿主に印象に残ったことを話す。





ワーク1

この2年間の年表を書いてみましょう！

	県内のできごと	地域のできごと
令和2年 1月	国内初の新型コロナウイルス感染確認	
2月	ダイヤモンド・プリンセス号での感染	
3月	オリンピック延期、マスクが消える	
4月	緊急事態宣言、アベノマスク配布	
5月	政府が「新しい生活様式」を発表	
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月	1日の感染者数が100名を超える	
12月	変異株が出現、「Go To トラベル」一時停止	
令和3年 1月	2度目の緊急事態宣言	
2月	医療従事者対象のワクチン接種開始	
3月		
4月	3度目の緊急事態宣言	
5月		
6月		
7月		
8月	4度目の緊急事態宣言	
9月		
10月		
11月		
12月		
令和4年 1月	オミクロン株の感染が広がる	
2月		
3月		



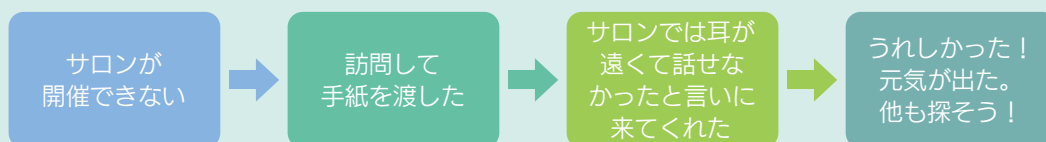
ワーク2

あなたが元気になれるそうなことは？

人が元気になるさまざまな物語があります。

サロン主催者の A さんは、サロンが開催できないときに、利用者宅を訪問して手紙を渡しました。すると、一人の利用者が反対に A さんの家を訪ね、お礼を言われました。

「サロンでは耳が遠くて十分話せなかった。でも、この前来ていただいて久しぶりに話すことができてうれしかった」。これを聞いた A さんは、うれしくて元気が出ました。そして“はっと”気が付きました。「こんな人が他にもいるのでは？ サロンのほかにも心を通わすことはあるのでは」と、自分ができる範囲でスマホを教えていくことを始められました。



人が元気になるきっかけは、「心が通う場面」にあるのね。

皆さんも「元気のもと」を考えてみましょう

こんなときだからこそ、不安や困りごとだけでなく、「ワクワクすること」や「工夫していること」等の「元気のもと」を話し合いながら知恵を寄せ合い、協力体制を作り上げたいものです。お互いの「元気のもと」を聞くことで、その人の人生や背景がうかがえることがあります。試してみてください。

【すすめかた】

- ①真真中に自分の名前を書く。
- ②自分の関わっている人を書く。
- ③これがあれば元気になるものを赤字で書く。

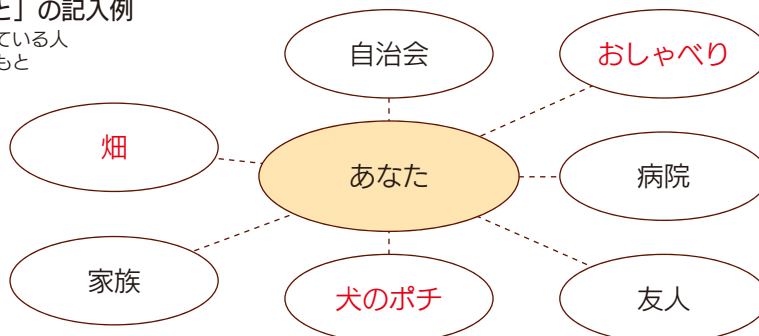
「元気のもと」のこんなことを話し合ってみましょう。



- ・〇〇の一番の思い出は？
- ・〇〇のどんなところが良いですか？
- ・そのとき、どんな気持ちに？

「元気のもと」の記入例

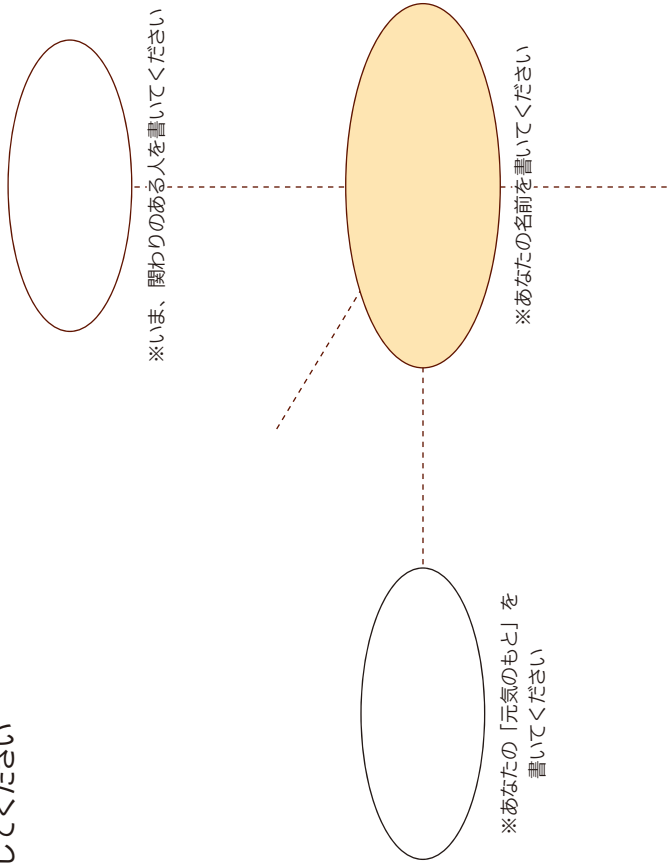
黒字：関わっている人
赤字：元気のもと



「元気のもと」だけを書いてもよいです。

「元気のもと」

※コピーして使用してください





ワーク3

「気になること」への方策を考えよう

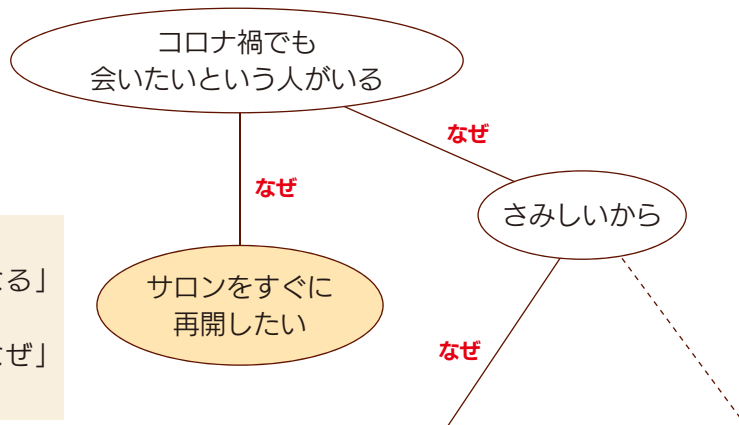
コロナ禍では、度重なる感染拡大により、不安や孤立が拡大しています。さらに、地域や個人の背景が違い、取り組み等に関しても温度差、スピード差が出ています。「違っていいんだ」とお互いを認め合いながら、「気になっていること」を解決する具体的な方策を考えていくために、「なぜ」「なぜ」と繰り返し探っていく「**ロジックツリー**」の手法を試してみましょう。

第1段階 「理由を探る」

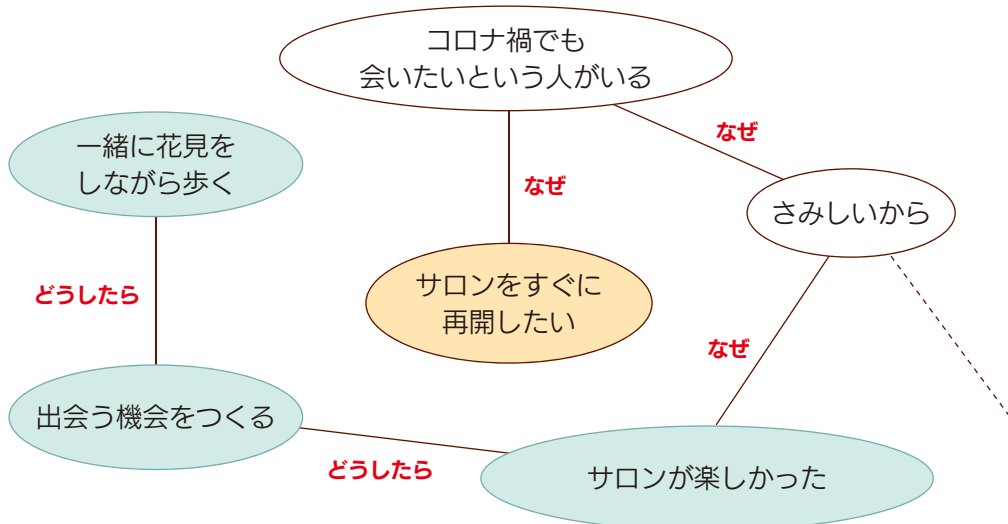
※三木市の事例を参考にしました。

【すすめかた】

- ①真ん中に「気になる」ことを書く。
- ②気になるのは「なぜ」か、意見を出す。



第2段階 「具体的な方法を考える」

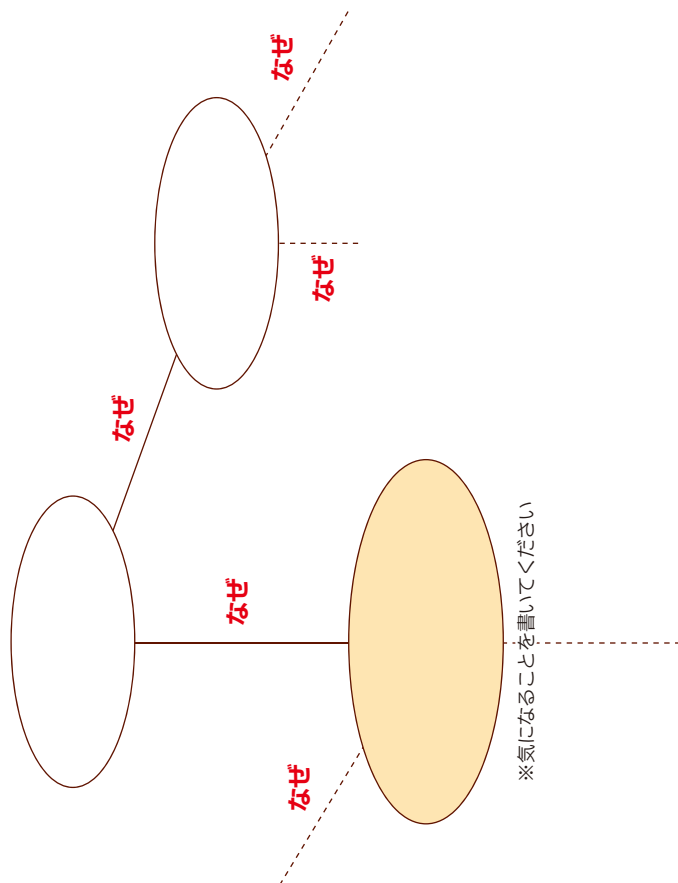


【すすめかた】

- ①「気になること」を「どうしたら」よいか、意見を出す。
- ②明日からでもできる具体的な方法を考える。

ロジックツリー

※コピーして使用してください



おわりに

～混乱したら、ここにもどろうよ～

コロナ禍は、まだまだ先が見えません。だれも経験したことがないことを乗り越えていこうとしています。

兵庫県社協では、この2年間、県内の生活支援コーディネーター等から小さな声を聴き取り、訪ねてみて分かったことがたくさんありました。そして、この混乱期にだれもが必死に生きようと、そして、つながろうとする姿がありました。

繰り返す感染拡大、こんな時だからこそ、ちょっと立ち止まって休んでほしかった。

そして、振り返ってください。みなさんの軌跡は、しっかりと残されています。大きな一歩を歩んでおられます。

これからも、混乱することがあるかもしれません。その時は、この本を見ながら、「あのときも、いろんなことがあったなあ」と思い起こしてください。

立ち止まってみると聞こえてきませんか？ 周りの人の、そして、自分の心の声。

未知のウイルスに立ち向かってきた2年間でした。不安の中で頑張ってこられた地域の方々やそのみなさんを支えてきた生活支援コーディネーターをはじめとする方々に、この本が、何かの手助けになれば幸いです。

この本は、まだ途中経過です。
これからも、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。



つながり続けるための地域づくりシリーズ①

**コロナ禍での地域福祉活動を
みんなで振り返る「たちどまりの本」**

【発行日】 令和4年3月

【発行者】 社会福祉法人 兵庫県社会福祉協議会

〒651-0062 神戸市中央区坂口通 2-1-1 兵庫県福祉センター内

TEL 078-242-4633 / FAX 078-242-4153

URL <https://www.hyogo-wel.or.jp/>

